

## 第1 事業の概要

当協会は、公益法人改革に伴い平成25年3月19日付で一般財団法人への認可を受け、同年4月1日設立登記を行い一般財団法人へ移行した。

平成25年度は、一般財団法人としての初年度であり、継続事業として「日本学の総合研究・普及」、「日本学に関する講演会・講習会の開催」、「日本学に関する雑誌・図書の刊行」の3事業を実施し、当協会の目的である学術文化の発展に寄与すべく尽力したところである。

## 第2 事業の実施状況

### 1 日本学の総合研究・普及(継続事業1)

本事業は、広範かつ多岐にわたる日本学の総合研究を研究者の個人研究、共同研究あるいは研究会を通じて行うとともに、その普及を図るものである。

#### (1) 研究及び研究会

研究者は、大学教授、高校教諭、評論家などの本会の研究員をはじめ、本会の趣旨に賛同する研究者であるが、特に専任研究員として委嘱した12名については、「協会創立60周年記念事業実施計画」で指定した研究項目の研究を行ったところである。

研究会については、東京における学生対象の古典講読の研究会を実施したほか、地方(水戸、伊勢、岐阜、大阪、名古屋等)においても地域の特性に応じた定例研究会を行った。

#### (2) 公開研究会

平成23年度から実施している公開研究会は、25年度も引き続き「日本の近現代戦史に学ぶ会」と「先哲に学ぶ会」を実施した。

「日本の近現代戦史に学ぶ会」は、「日米戦争の史実に戦いの本質を考える」をテーマに、元防衛研究所戦史部主任研究官、当協会常務理事の永江太郎氏が5回、元防衛大学校防衛学教授、杉之尾宣生氏が1回発表を行った。

日時	発表者	演題
H25. 4. 27 (土)	元防衛研究所主任研究官 永江太郎氏	「初期作戦における国防圏の設定と問題点」 —香港、ビルマ、ラバウル等の攻略—
H25. 6. 22 (土)	同上	「次期(第二段)作戦計画の戦略的考察」 —ミッドウェーとガダルカナルの背景—

日 時	発表者	演 題
H25. 9. 21 (土)	元防衛研究所主任研究官 永江太郎氏	「ミッドウェー海戦」 —勝てる戦いだったのか。真の敗 因は何か—
H25. 11. 16 (土)	同 上	「ガダルカナル作戦」 —真の敗因は何か—
H26. 1. 11 (土)	元防衛大学校防衛学教授 杉之尾宣生氏	「ソロモンと東部ニューギニアの 戦い」
H26. 3. 15 (土)	元防衛研究所主任研究官 永江太郎氏	「守勢作戦への転換と陸海軍統合 問題」

「先哲に学ぶ会」は、下記の通り4氏が、それぞれの演題について発表を行った。

日 時	発表者	演 題
H25. 7. 20 (土)	元拓殖大学総長 小田村 四郎氏	「明治維新を彩る幕末の志士」 吉田松陰
H25. 10. 12 (土)	モラロジー研究所研究主幹 京都産業大学名誉教授 所 功氏	「明治維新を彩る幕末の志士」 橋本左内
H25. 12. 21 (土)	宇都宮市立田原中学校 副校長・博士(文学) 阿部邦男氏	「明治維新に理念的根拠を与えた 学者」 蒲生君平
H26. 2. 1 (土)	(一財)日本学協会 常務理事 永江太郎氏	「激動の幕末に日本人の心を詠んだ 歌人」 橋 曙 覧

### (3) 研究成果の普及

研究成果の論文等は、学術誌『藝林』と機関誌『日本』に発表した。

以上の研究事業の概要は、下記のとおりである。

研究者の学会発表回数：11編	『藝林』発表論文
研究者の論文発表回数：57編	『日本』発表論文
総合研究会及び定例研究会	開催数46回 参加者：約470名
公開研究会	開催数10回 参加者：508名

## 2 日本学に関する講演会・講習会の開催(継続事業2)

本事業は、日本学普及のために行っている講演会、藝林会学術研究大会、講習会の事業である。

#### (1) 講演会

平成25年度は、東京講演会（第10回）を学士会館において、「尖閣諸島問題について—わが国の領有権の正当性ととるべき対応策—」と題して（講師 岐阜女子大学客員教授・日本安全保障・危機管理学会理事 矢野義昭氏。要旨は『日本』第63巻第12号に掲載）、また大阪講演会（第11回）は国民会館において「岐路に立つ中国経済」と題して（講師 関西学院大学教授 伊藤正一氏。）開催した。

#### (2) 藝林会学術研究大会

藝林会学術研究大会は、毎年テーマを設けて開催し、記念講演、研究発表及び現地見学等を行っているが、第7回目となる平成25年度は、三重県伊勢市の皇學館大學において「伊勢神道をめぐる諸問題」を主題に、研究発表、相互討論を行った。（発表論文等は、『藝林』第63巻第1号に掲載）

#### (3) 講習会

講習会は、日本学を高校生や大学生、社会人等の青少年に普及するために2泊3日の合宿形式で実施しているが、平成25年度も「わが国と日本人のあり方を考える」をテーマに奈良・大阪で実施した。

内容は、大学教授等各界の専門家による講義、講話をはじめ参加者の相互討議や意見交換、史跡見学等により日本の歴史や先哲について理解が深まるようきめ細かい指導を実施した。

#### (4) 開催結果

定例講演会（東京・関西）	参加者：106名
藝林会学術研究大会	参加者：91名
講習会	参加者：61名

#### (5) 広報活動

定例講演会、藝林会学術研究大会、講習会の開催は、ホームページを始め、その都度、新聞(『産経新聞』)及び月刊誌(『正論』)で、会員以外にも広く参加を呼びかける広告を実施した。

### 3 日本学に関する雑誌・図書の刊行(継続事業3)

本事業は、日本学に関する研究成果の発表並びに普及を図るため、学術誌『藝林』と機関誌『日本』を発行するとともに日本学に関する図書の刊行および出版助成等を行うものである。

(1) 学術誌『藝林』の編集・刊行

『藝林』は、国民の道義を高揚し日本文化を向上させるため、真摯で自由な学問的研究を行うことを目的に設立された藝林会の学術誌である。歴史・文学・思想などの人文系学問の研究成果を発表する場として、会員のみならず広く一般から寄稿された論文を掲載している。平成25年度は、第62巻第1・2号を刊行した。

(2) 機関誌『日本』の編集・刊行

『日本』は、広く日本学を普及するために刊行している月刊誌である。

執筆者は、評論家、大学教授をはじめ各界の専門家、有識者等で、内容は政治、経済、歴史、文学など幅広い分野にわたっているが、投稿も掲載している。平成25年度は第63巻第4号～第64巻第3号を刊行した。

販売・頒布は、定期購読者以外にも、講演会・講習会や公開研究会で実施したほか、有識者への寄贈や学生には購読料を半額とするなどして普及に努めた。

(3) 図書の刊行

ア、図書は、『平泉澄著作集』の電子化刊行の研究と準備を実施した。

イ、『平泉澄博士神道論抄』の刊行準備を実施、(平成26年5月に刊行する)。

(4) 研究成果発表関係刊行物

ア 定期刊行物

名 称	頁 数	発 行 部 数	備 考
藝 林	190頁	400部	年2回刊行
日 本	50頁	1,200部	年12回刊行

(5) 広報活動

『藝林』と『日本』の広報は、年に5回新聞広告（『産経新聞』）を行った。